Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-18

バルザック『名うてのゴディサール』における文学・社会・狂気

吉田, 典子

(Citation)
近代,84:1-25

(Issue Date)
1999-09

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81001605

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001605

バルザック『名うてのゴディサール』における文学／社会／狂気[1]

吉田典子

1　はじめに

バルザックの『名うてのゴディサール』*L'Illustre Gaudissart*（一八三三）[2]は「ひとりの比類なきセールスマン」、巧みな弁舌と人を惹きつける力が非常な商売上手の評判を呼んで、「名うての」(illustre,「名高い」「有名な」) という枕詞がつけられたある地方回りのセールスマンの話である。

まず簡単に作品を要約しておこう。「出張セールスマン」(commis voyageur) という「現代の風俗習慣によって新しく生み出された」種属一般についての社会学的考察で始まるこの作品は、その典型的個体として「ゴディサール」という人物を導入する。この名前ほど、「その人物の態度や物腰や人相や言葉づかいと調和していたためしはなかった」。彼の全身には、「からかい笑い」(gaudisserie) と「猥雑味」(gaudriole) がみなぎっているのである (Gaudissart という名前は上の二つの単語の語源でもある古フランス語の動詞 gaudir「喜びを表にあらわす」を想起させる)。そしてこの陽気で少々品はないが、人心をくすぐるのに長けたセールスマンが、一八三〇年の七月革命を境にして、それまでの帽子や小間物の販売から、生命保険と各種新聞のセールスに転身した次第が記される。次に

出張旅行に出かける前夜のゴディサールと愛人の花売り娘ジェニーとの会話があり、新しい商売に賭けるゴディサールの意気込みが示される。さらに出張先のゴディサールからジェニーへの手紙が挿入されて、セールスマン自身の口から出張旅行の成果が途中報告される。

このようにして、出張セールスマンの一般的説明から個別的実例へ、そして人物の外面描写からその人物自身による語り（対話体や書簡体の使用）へという変化に富んだ展開によって、ゴディサールの人となりが明瞭に示された後で、作品の後半は、トゥーレーヌ地方ののどかなワインの産地ヴーヴレを舞台にした一種の笑話となる。ここで地方を征服すべくやってきたパリの名うてのセールスマンは、逆に嘲弄好きのトゥーレーヌ人に一杯食わせられることになるのである。ゴディサールは宿屋の主人から紹介されて、町の有力ブルジョワである元染物屋のヴェルニエという男を訪ねていくが、これまでパリからやってくる何人ものセールスマンを相手にした経験があるヴェルニエは、なんとかしてこの男に一泡吹かせてやりたいものだと考えた。そこで彼はゴディサールに対し、以前銀行家だった有力で有能な人物と偽って、実はまぎれもない狂人であるマルガリティスを紹介する。この狂人の妄想はとりわけ、所有してもいない二樽のぶどう酒を何としても売りさばきたいと考えていることであった。生命保険や各種新聞を是が非でも売り込もうとするセールスマンと、存在しないぶどう酒を売ることしか念頭にない狂人。しかしゴディサールは、相手が狂人であることに最後まで気がつかない。ついに彼はぶどう酒二樽を買い取る代わりに、〈子供新聞〉の予約購読と生命保険への推薦をとりつけて、意気揚々と宿屋へ引き上げる。しかし宿の主人からマルガリティスが狂人であることを知らされ、だまされたことに気づいたゴディサールは、ヴェルニエに決闘を申し込む。この決闘事件は、町の人々の尽力で、二人とも空に向けて発砲することで落着し、ゴディサールとヴェルニエは和解するが、何としても腹の虫が治まらないゴディサールは、マルガリティスの妻からぶどう酒の違約金を取って、早々にこの地を引き上

げることにする。

以上が物語の概要であるが、この作品にはひとつの創作上の逸話がつきまとっていることも付け加えておこう。バルザックは、プレイヤッド版にして三八ページに及ぶこの中編を「一晩で」書いたと豪語しているのである。その間の事情を要約すると次のようになる。一八三三年当時バルザックは、『人間喜劇』の初期形態である『十九世紀風俗研究』（全十二巻）を出版する計画を立て、契約金二万七千フランでベシェ書店と話がまとまって、その年の暮れまでに最初の二巻を出版することになっていた。一巻目は『ウージェニー・グランデ』、二巻目には『独身者たち』（のちに『トゥールの司祭』と改題）『ざくろ屋敷』など五編の中短編を入れる予定で、すべて出来上がっているように思えたが、いざ二巻目を編集してみると、ページ数が不足していることがわかった。書店側はぜひとも未発表の作品で穴埋めをしてくれるよう、強く要請してきた。十一月一日付けのハンスカ夫人への手紙で、バルザックは「四－五十ページ」の「情景（scène）」が必要だと書いているが、その翌日の手紙で『骨董室』を十七枚、続けざまに書いたことを報告している。[3] しかしその後『骨董室』は単に埋め草になるような作品ではなく、もっとじっくり取り組むべき内容をもっていることがわかってきた。しかし期日は迫っている。そして何よりもそのときバルザックは、その年の九月に初めて会った文通相手の「異国の女」ハンスカ夫人とジュネーヴで再会する約束をしていたのである。彼は一刻も早くジュネーヴに飛んでいきたかったが、作品ができない限り、書店側は出発を許してくれない。しかしついに十二月一日付けのハンスカ夫人への手紙において、バルザックは勝利を報告する。「どうかこの『ゴディサール』を呪ってください。印刷屋の使った活字が、全体の分量を縮めてしまったので、その巻の穴埋めをするために、これを一晩ででっち上げねばならなかったのです。しかもそれが、なんと八十ページもあるんですからね。[4]」

一晩というのはやや大げさであるにしても（バルザックはしばしばこのように自身の筆の早さを自慢するのが好きだった）、諸般の状況から見てこの作品がごく短期間で書かれたことは確かである。『ゴディサール』は、書店からの強力な催促と女性に対する強い情熱（実際、この後のジュネーヴ滞在中にバルザックはハンスカ夫人への思いを遂げて二人の関係が成立したと言われている）に二重に苛まれるという、実にせっぱ詰まったバルザック的創作状況の中で書かれた作品であった。そのためかどうか、発表当初から、この作品に対しては「不自然」（invraisemblances）「悪趣味」（fautes de goût）「乱雑」（désordre）「不均衡」（manque d'équilibre）「埋め草」（remplissages）といった非難がなされた。[5] バルザックのもっとも良き理解者のひとりであった女友達のズュルマ・カロー夫人ですら、この作品には深い失望を表明している。[6] 名うてのセールスマンが相手の狂気に気がつかないという筋書きが不自然であり、やや猥雑なゴディサールの人柄や「狂人」という存在の導入が悪趣味とされ、また多様な叙述体の混在や前半と後半の不均衡が、批判の的となったのであろう。

しかし近年『ゴディサール』は、同作品のクラシック・ガルニエ版編者であるベルナール・ギュイヨン[7]や、プレイヤッド版編者のピエール・バルベリス[8]らによって、さまざまな観点から再評価されている。まず文学的成功としては、「ゴディサール」という一個の典型的人物を創造したこと、笑話としての喜劇性、バルザックの熟知しているトゥーレーヌ地方の風俗描写などを挙げることができる。また政治的・経済的観点から見て、パリと地方の対立の主題、そして何よりも七月革命直後の社会的文脈への参照などが重要な点となる。ギュイヨンは特に後者の「社会研究」（étude sociale）としての側面に注目し、『ゴディサール』は一九世紀初頭の資本主義の躍進に関する社会科学的考察であると見ている。

一方、これまでの批評家によって単なる「悪趣味」と見なされ、無視または圧殺されてきた「狂人」マルガリティスの存在に注目したのは、アメリカのイェール学派第二世代に属する批評家ショシャナ・フェルマンである。彼女は、狂気という「文学的事象」をめぐる一連の研究のひとつとして『ゴディサール』を取り上げて、この作品における狂気の修辞学とその機能について瞠目すべき考察をおこなっている。[9] 彼女によれば、『ドン・キホーテ』に代表されるように、「小説的なもの」の原理そのものが狂気への誘惑であり、「あらゆる真の小説はひとつの治療法として構築され」、「ある反射的なシステムにより、狂気の誘惑とその否認とを同時に内包している」。そして小説のこの「構造的スキゾフレニー」を見事に具現している古典的テクストが『ゴディサール』であるとするのである。

ショシャナ・フェルマンの論考は、『ゴディサール』における「狂気」の問題に着目した点で非常に示唆的であるが、われわれとしてはそれを「小説」というジャンルのメタ・テクスト的問題として考察するだけではなく、ふたたび同時代の社会的・経済的文脈へと送り返すことによって、この資本主義の草創期に根源的に内包されている「狂気」の問題としてとらえ直すことができるのではないかと思う。さらにそれは、そうした経済至上主義の近代産業社会において創作活動をおこなった作家バルザック自身の「狂気」の問題にも通じるだろう。なぜならバルザックにとって執筆行為はなによりもひとつの経済活動であり、彼においては文学的実践と金銭への欲望が緊密に結びついているからである。このテクストにおいてゴディサールが売り歩く保険は、「知的資本」(capitaux intellectuels) に関する保険であり、話はまさに「資本」(capital) と「知性」(intelligence) とに関わってくるのである。

本論においては、まず「ゴディサール」という人物の特徴とその現代性についてまとめた後で、ショシャナ・フェルマンの分析を踏まえながらテクストにおける「狂人」の言説とその機能について検討する。このようにしてこのテクストの「狂気」の性格を浮かび上がらせた上で、同時代の社会・経済情勢を再確認し、バルザックにおいて複雑に

絡み合う文学創造と経済活動と狂気の問題に向けて論を進めたいと思う。

2　「ゴディサール」の人物像とその現代性

文学史的観点から見て、『ゴディサール』という作品の功績はなによりもまず、一個の典型的人物を創造したことにあるだろう。今日「ゴディサール」という固有名詞は、ピエール・バルベリスが述べているように、「アルパゴン」(Harpagon) や「タルチュフ」(Tartuffe) あるいは「フィガロ」(Figaro) などと同様に用いられる。[10] バルザック自身も後の短編『ゴディサール二世』(一八四四) において、商売上手なある流行品店の店主を同名の二世として登場させているくらいである。『十九世紀ラルース大事典』でも、「出張セールスマン」の項目は半分以上がバルザックの『ゴディサール』の話題で占められている。しかしモリエールやボーマルシェの登場人物とは異なって、バルザックの創造した人物の特徴は、「ラスティニャック」などもそうであるように、近代のフランス、それも「山師的冒険へと乗り出した近代フランス」(une France moderne embarquée dans une aventure mensongère) の産物であることだろう。[11]

「出張セールスマン」(commis voyageur) という職業は、大きな商店や会社の依頼を受け、遠方へと出張して代理販売をおこなう仕事だが、辞書によればこの語は一七九二年の初出となっており、近代的な商業の始まりと不可分の関係にあることがわかる。つまりショーウィンドーを持ったショッピング空間であるパレ＝ロワイヤルの回廊ギャルリー・デ・ボワ (一七八四年) や最初期のパサージュ (一七七九年)、デパートの前身というべきマガザン・ド・ヌーヴォーテなどと同じく、この職業もまた、十八世紀末に誕生したのである。バルザックは小説の冒頭部で、出張

セールスマンを「転換期」の人間として位置づけている。

この人種は、ある種の事柄における、ひとつの大きな転換期を印づける運命にあるのではないか。それは、観察者にとってみれば、物質的開発の時代から知的開発の時代への転換期である。われらが十九世紀という時代は、独創的な創造にあふれた孤立した力の支配から、単一ではあるがすべてを平準化する力の支配へと移行する時代であろう。それは製品を均質にして大量に放出し、もろもろの社会の最終的な表現形態である中央集権の思想に服従する時代への移行期である。(p.561)

出張セールスマンという職業は、大量生産時代を背景に、とりわけ地方の民衆を教化することによって、中央権力の下にすべてを平準化しようとする動きを体現している。すなわちいわゆる「近代化」のエージェントである。しかし十九世紀も後期になると、ジャーナリズムも地方まで浸透し、デパートのカタログが大量に発送されて通信販売も盛んになり、出張セールスマンという職業の重要性も徐々に減少すると思われる。したがって遠距離乗合馬車(diligence)で旅する出張セールスマンは、まさにバルザックの時代の人間なのである。というのも一八五〇年代以降は、急速な発展を遂げる鉄道網が、パリと地方とを結ぶ主要な交通手段となっていくからである。

出張セールスマンを近くからよく見回してみたまえ。この姿をじっくり観察したまえ。そのオリーブ色のフロックコートも、外套も、モロッコ革の襟も、パイプも、青い縞の入ったキャラコのワイシャツも、忘れてはいけない。(pp.563-4)

このような描写を読めば、ゴディサールはやはり時代の刻印を受けていることがわかる。しかしバルザックの描き出す人物像には、「近代」という時代を経て現代にも通じる要素が多分に含まれているのである。

まず、すでに一部引用した彼の身体的特徴からみていくことにしよう。

> 名前が、これほどその人物の態度や物腰や人相や声や言葉使いと調和していたためしはなかった。すべてがこのセールスマンに笑いかけ、セールスマンはすべてに笑いかけていた。[……] 駄洒落、高笑い、坊さんのようなでっぷりした顔、コルドリエ会修道士のような赤ら顔、ラブレー的な風体。衣服も、体つきも、精神も、顔つきも、互いに調和し合って、彼という人間全体に、からかい笑い（gaudisserie）と猥雑味（gaudriole）をみなぎらせていた。(pp.564-5)

> ゴディサールは当年とって三十一歳、中背で、長距離乗合馬車で旅するのに慣れている男らしく、でっぷりと太っていた。かぼちゃのように丸い顔をして、血色がよく、目鼻立ちは整っていて、どこの国の芸術家でも「豊饒」や「法律」「力」「商業」などの彫像に使うような、あの典型的な顔に似ていた。突き出た腹は洋梨の形をしており、足は短かったが、彼は敏捷で神経質だった。(p.572)

快活な笑顔と愛想の良さ、でっぷりと太った多血質の陽気さとその裏に隠された神経の細やかさが、この人物の特徴である。ゴディサールは別の箇所で「人間機械」(cette machine humaine)(p.562) とも呼ばれているが、蒸気機関

にも比されるその旺盛な活動力は、「進歩」の時代、資本主義経済の飛躍的発展の時代を象徴する。彼はまさしく、「豊饒」(l'Abondance)や「法律」(la Loi)「力」(la Force)「商業」(le Commerce)を体現する存在として提示されている点に注目しておきたい。

それではこの人物の知のあり方はどうか。それはきわめて広範でありながら、あらゆるものの表面を浮遊し、決してひとつの地点でとどまることがないという特性を持つ。

> この男はすべてを見、すべてを知り、またあらゆる人間を知っている。パリの悪徳に飽満していながら、地方の純朴さを装うこともできる。[……] 彼は物事の奥まで見通すということは決してない。人や場所についてはその名前を覚え、物についてはその表面だけを評価する。彼はすべてを自分の尺度で計るための特別の物差しを持っている。しかしその視線は事物の上を滑るだけで、中まで見通すことはないのである。すべてに興味を持つが、何事も彼の興味を引くことはない。[……] 何事においても即断する習慣は、彼を本質的に裁き手にしてしまう。彼はパリや地方の芝居や役者について、一刀両断、わがもの顔で語る。しかも彼は、フランス中の良い場所、悪い場所を、その身その目で(*de actu et visu*)知っている。彼は必要に応じて、「悪徳」へでも「美徳」へでも、同様の確信を持って、諸君を導いてくれるだろう。(pp.561-2)

このような出張セールスマン(commis voyageur)の特性は、彼が本質的に「旅する人」(voyageur)であるところから来る。彼は「村と首都をつなぐ輪」である。この「草の根の外交官」の役割は何よりも人や物を結びあわせ、リンクさせることであるからだ。それはどこまでも水平に広がり、決して深まることはない。このような表層的な知の

あり方は、現代の情報化社会の先駆けとも言えるだろう。しかも彼は必要に応じて、どのような仮面でもかぶることができる。「表面上はすべての党派に与して」おり、「すばらしいパントマイム役者」であり、「郡長のところには行政官として、銀行家のところには資産家として、王党派の人間のところへは信心深い王政主義者として、ブルジョワのところへはブルジョワとして、入っていくすべを心得ていた」のである。

さらにゴディサールの大きな特性は「誘惑者」であることだ。彼の最大の武器は「雄弁」であるが、彼の仕事は言葉によって相手を「誘惑」することである。

> しゃべること！　話を聞かせること、これすなわち、誘惑することではないだろうか？　両院を持つ国家も、両の耳を傾ける女性も、いずれも破滅する。イヴと蛇とは、世界と共に生まれ、おそらく世界と共に終わるこの日常茶飯事の永遠の神話なのである。(p.563)

ショシャナ・フェルマンが指摘するように、ゴディサールにとっては「言葉こそが彼の権力への意志が顕現化する力の領域」となる。彼ら出張セールスマンは「いかに御しがたい大衆をも言葉であやつり、民衆の頭脳をこね回し、どれほど硬い斑岩をもそのやすりにかけて磨き上げる不屈の研磨職人のような仕事をしている」(p.563) のである。その弁舌の力の強大さは「鳥もちと硫酸」に喩えられている。「鳥もちというのは、犠牲者をつかまえ、からみつけ、自分にくっつけるためのものであり、硫酸というのは、犠牲者のいかに手強い打算をも溶かしてしまうためのもの」(p.564) である。とりわけ「硫酸」という比喩は、この力の強力さと毒性を示している。

相手を無にするような「誘惑」の力は、ゴディサールの人物像において、彼の好色な性格と性的魅力として表れて

いることにも着目すべきだろう。ゴディサールと愛人の花売り娘ジェニー・クーラン嬢とのふざけ半分の絡みも、この言葉＝権力＝男性の図式を裏付ける。「いいから聞いてくれよ。ずっとおまえが話していたら、おまえの方が正しいことになってしまう」(Mais écoute donc; si tu parles toujours, tu auras raison) (p.569) というゴディサールの台詞は徴候的である。彼は最後に、半ば服を脱いだジェニーを抱えてベッドに運びながら、「おだまり、自由な女よ！」(Taisez-vous, *femme libre!*) (「自由な女」はゴディサールがその機関紙を勧誘することになるサン＝シモン主義の用語) と叫ぶのである (p.572) ピエール・バルベリスが述べているように、[12] 地方の宿屋で「給仕女に微笑みかけては、その腰か心かをとらえる」(p.565) ゴディサールにあっては、地方で「子供を作る」(業界用語で「〈子供新聞〉を売る」こと) (p.569) という比喩は単なる冗談にはとどまらない。パリによる地方の征服は、あからさまな性的征服と重ね合わされているが、ゴディサールの場合それは、まだまだ若々しい資本主義の活力と生産性を喚起するものである。しかしここにはすでに、後にゾラが『ボヌール・デ・ダム百貨店』(一八八三) の中で大々的に描き出すような商業的誘惑と性的誘惑の並列性[13]が認められ、さらに言葉と権力との深い関連性が示唆されていることを確認しておく必要がある。

3　「狂人」の言説とその機能

さてこのように、物語の前半部で「名うてのゴディサール」のまさに「名うて」であるゆえんが記された後で、後半部はすでに概略を示したように、このセールスマンがトゥーレーヌの住民たちに一杯食わせられる話となる。ベルナール・ギュイヨンは、「だましたつもりがだまされる」(Tel est pris qui croyait prendre) といった諺を地でい

くようなこの笑話は、ラ・フォンテーヌやボッカチオ、ラブレーなどの系統にある「民衆的コント」(conte populaire)であるとして、バルザックの同時期の作品である『風流滑稽譚』*Contes drôlatiques*(一八三二、三三、三七)との関連を指摘している。[14] たしかに相手が狂人であることに一向に気がつかず、逆に自分の方が買い手になってしまうセールスマンという筋書き自体が典型的な笑話を構成しているし、そのうえゴディサールの芝居がかった台詞、及び腰の決闘事件、負け犬の遠吠えのような結末部などもユーモラスである。

しかしながら後半の大きな部分を占めるゴディサールと狂人マルガリティスとの対話に関して、ギュイヨンの評価は手厳しい。彼は「語り手は、取り違え(quiproquos)や地口(calembours)のなかを、足をもたつかせながら鈍重に歩いている」と述べ、またこの喜劇的な話は狂人の存在ゆえに悲痛なものになっているとも言う。[15] ギュイヨンによれば、狂人を用いて読者を楽しませようとしたバルザックは思い違いをしており、「ゴディサールの冒険のなかへのこの狂人に闖入」は明らかな「悪趣味」(faute de goût)ということになる。[16]

これに対して「狂人」の存在の重要性に着目したのが、すでに述べたショシャナ・フェルマンである。彼女は狂人の言説はそれなりに筋道が通っているとして、その「狂気の修辞学」のメカニズムを分析し、それがゴディサールの「雄弁」に対して迷妄覚醒的な機能を持っていることを示した。その原理はまず「反復」というレトリックにある。ゴディサールの鍛え上げられた弁舌に対し、狂人の返答は主として、ゴディサールの言葉の中の数語を反復することによって構成される。しかしそこには奇妙な「ずらし」の効果が生じるのである。なぜなら狂人は、ゴディサールの比喩的で仮定的な言辞をすべて字義通りにとらえてしまうからである。

「さて具体的な例をあげて、説明いたしましょう。[……]あなたさまは、年金で暮らす地主ではなく、

ひとりの画家、音楽家、芸術家、詩人でいらっしゃる……」

「わしは画家じゃ」と狂人は注釈を入れるように言った。

「なるほど、ではそういうことにいたしましょう。私の比喩をよく理解していただける以上、あなたさまは画家であり、素晴らしい将来、豊かな将来をもっておられます。しかし先へと進みましょう（Mais je vais plus loin）……」

この言葉を聞いて狂人は、ゴディサールが出て行くつもりではないかと不安げに様子をうかがったが、彼があいかわらず座っているのを見て、ようやく安心した。

「あなたさまがまだ、何者にもなっておられないとしても」とゴディサールは続けて言った。「あなたさまは感じておられる（Vous vous sentez）……」

「わしは感じておる（Je me sens）」と狂人は言った。

「こんなふうに思っておられる（Vous vous dites）。『私は大臣になるぞ』と。さて、画家であり、芸術家であり、文学者であり、将来の大臣であられるあなたさまは、その希望を数字にし、その価格を定め、たとえばご自身を十万エキュに評価されるとします……」

「あんたはわしに十万エキュくれるのかね」と狂人は言った。（p.584）

狂人にたいして「たとえば」といった話は通用しない。「先へと進む」（aller plus loin）といった程度のごく日常的な比喩的表現でさえ、彼にはゴディサールが部屋を出ていくのだと思えるのである。彼に理解できるのは、即物的な金銭だけであるようだ。「あなたさまは感じておられる……」（Vous vous sentez……）という表現にしても、ゴディ

サールにしてみれば、あとで Vous vous dites と言い換えているように、単に「……と思っている」という程度の意味合いで使っているのだが、狂人が「わしは感じておる（Je me sens）」と反復すると、その言葉（字義通りには「私は自分を感じている」の意）は妙に存在論的な響きを帯びてくるのである。狂人が反復する一語一語が、ショシャナ・フェルマンの指摘するように、ゴディサールの「雄弁」を問題化し、その虚構性を暴き出し、言語の力に対する盲目的な信頼を覆すものとなっているのは確かである。

いずれにしてもこの小説が単なる笑話に終わっていないひとつの理由は、ここで狂人の言葉がはからずも、知的製品の広告やセールスという「この現代の狂気」（cette folie de notre époque）(P.567) の正体を暴き出しているからだろう。マルガリティスが売ろうとしているのは二樽のぶどう酒であり、ゴディサールは保険や新聞の契約を勧誘する。前者は狂人の妄想であり、後者は「思想」や「アイディア」（idée）と呼ばれるものであったとしても、いずれも「頭」の中で考えられた虚構であるという点では共通している。そのためかどうか、次に見るように、ゴディサールもマルガリティスも「頭（tête）」に関わる洒落や地口には卓越した才能を持っているのである。

もともとパリ小物の中でも「帽子」を本来の専門としていたゴディサールは、頭や帽子に関しての冗談には事欠かなかったことが記されている。

彼は帽子業界に絶大な感謝の念を抱いていて、こんなふうに言っていた。自分は頭の外側を研究したことで、その内側がよくわかるようになった（c'était en travaillant l'extérieur de la tête qu'il en avait compris l'intérieur）。自分はいつも人の頭に帽子をかぶせ（coiffer les gens）（比喩的には「人を夢中にさせ」）、人の頭に直接とびつく（se jeter à leur tête）（仲介なしに直接相手のところへ行く）のが商売である、などな

ど。(p.566)

頭の外側を覆うものである帽子は、その内側の「思想(idée)」と照応する。たとえばゴディサールが勧誘するある紳士は「灰色の帽子」をかぶっているが、これは王党派自由主義者の印であった(p.574)。ゴディサールの商売は「人の頭に帽子をかぶせる」こと、すなわち「人を夢中にさせる」ことであると同時に、文字通り「思想(idée)」を植えつけることでもあるのだが、彼自身も自分の扱う商品に応じて、また相手に応じて、どんな帽子でも自在にかぶることができる能力を持っていた。

一方のマルガリティスも「頭」に関する地口にかけてはゴディサールに負けていない。それどころかはるかに上手をいくと言ってもいいくらいである。自分のぶどう酒の話を始めたマルガリティスに対してゴディサールが、本題の「資産保険」の話に戻ろうと言ったとき、狂人は次のように答える。

「まさに本題じゃよ。うちの葡萄酒はキャピトゥー(capiteux「頭をくらくらさせる」)で、キャピトゥーの語源はキャピタル(capital「資産」)と一致する。ところであんたは、キャピタルの話をしとるんじゃろう……ええ? カプート(*caput*「(ラテン語で)頭」)、頭(tête)! ヴーヴレの筆頭ワイン(tête de Vouvray)、すべてが互いに関連しておる……」(p.587)

この狂人においては資産(capital, 複数でcapitaux)は、そのラテン語の語源(*caput*=tête)によって、「頭をくらくらさせる」(capiteux)ぶどう酒と結びつき、さらにはヴーヴレ地方の筆頭ワインの産地(tête de Vouvray)

ともつながるのである。前に見たゴディサールの冗談においては、シニフィアンのレベルでの戯れは存在しなかったが、狂人の言説においては、あらゆるシーニュが本来のシニフィエとの関連を失い、浮遊するシニフィアンは、狂人の固定観念である「ぶどう酒」と結びつこうとする。もうひとつの例をあげよう。

「では、旦那様、おたくのぶどう酒二樽を百フランで頂戴しましょう……」

「いやいや、百十フランじゃ」

「百十フランでも結構ですが、サン＝シモン主義のお偉方には百十フラン、私には百フランにお願いします。私は取引の仲介をしたのですから、手数料をいただかねば」

「百二十（cent vingt）フランで持っていきなされ」〔「サン・ヴァン」は「葡萄酒なし」（sans vin）に通じる語呂合わせ〕

「見事な洒落ですね。じつにすばらしいだけでなく、機知にあふれた（spirituel）ものでもある」

「いや、アルコール度が高い（spiritueux）んじゃよ」

「いよいよもってすばらしい、まるでニコレの劇場のようだ」（p.593）

このような言葉の眩暈は、実際に口にするヴーヴレ・ワインと相まって、ゴディサールの上に作用を及ぼさずにいない。「このぶどう酒は妙に頭にきますなあ」（ce vin porte singulièrement à la tête）（p.593）という台詞を最後に、セールスマンはついにぶどう酒二樽の注文書に署名してしまうのである。

このようにして言葉によって相手をうち負かそうとしたゴディサールは、逆に狂人の言葉に翻弄されることになる。

ショシャナ・フェルマンが述べているように、言語の主人である彼は、言語の奴隷でもあるのだ。一方のマルガリティスの方は、その奇妙に縦に長い顔が「修辞学級の老教師かそれとも屑屋かといった様子」(p.582) をしていると描写されているが、「屑屋」(chiffonnier) には比喩的に、くだらない雑文を書く三文文士の意味もあり、この狂気の言語の価値は、まさに両義的な性格を与えられているのである。

このような問題意識は、この作品自体がまぎれもなく言語によって構築されたテクストであるだけに、それをなかんずく自己言及的なものにしている。『ゴディサール』は単なる笑話としてだけではすますことのできない、豊かな広がりを持ったテクストであることは確かである。

4　近代産業社会と知的資本

さてこのように狂人の言語は、ゴディサールの雄弁に対してその虚構性を突きつけ、「この現代の狂気」(cette folie de notre époque) をある意味で相対化する機能を果たしていると考えられるが、ここで同時代の社会的・経済的文脈に立ち戻って、この「現代の狂気」の性格と『ゴディサール』の意義を考察したい。

『ゴディサール』は一八三三年十一月に執筆されているが、ここには「一八三〇年の政権交代」(le démé-nagement de 1830) を境にしての時代の変化が明確に描かれている。すなわち帽子やパリ小物を専門にしていたゴディサールは、七月革命を境に変身し、「目に見える製品の商売の委託販売をやめて、パリにおける投機の最上層の領域へと飛躍」する。彼は「物質を捨てて思想をとり、手工業製品を放棄して、知性のはるかに純粋な精製品に目を付けた」のである。具体的には保険や新聞のことであるが、これには一八三〇年以降、「知性とその生産物がひとつ

の企業となり」、有価証券と同様、投機の対象となったという背景が記されている（p.566）。

こうした動きを推進していたのは、七月王政下で実権を握っていたパリのオート・バンク（la Haute Banque）勢力であった。ゴディサールに保険の勧誘を依頼してきたのは、「パリの銀行家や資産家たちが作った会社」（p.583）であったし、ゴディサールが二つの新聞社、すなわちサン＝シモン派の〈地球〉紙（*la Globe*）と共和派の〈運動〉紙（*le Mouvement*）に雇われたのも、この「生きた趣意書」というべき男の弁舌の才が、パリの「一流金融界（オート・バンク）や一流の知的外交界」（la sphère de la haute banque et de la haute diplomatie intellectuelle）（p.568）で有名になったからに他ならない。オート・バンクとは『ニュシンゲン銀行』に関する拙論[17]でも触れたように、ロートシルドを筆頭とする二十人ほどの大金融業者の集団のことで、最初卸売り商業から出発し、国際貿易業から貨幣取引・為替取引を展開、しだいに銀行業務に重点を移し、ヨーロッパ諸国の公債発行＝引受業務を独占して勢力を拡張した集団である。彼らは鉱山・運河・鉄道などの事業に積極的に投資することで、七月王政下におけるフランスの経済成長の牽引役となったのである。

オート・バンク勢力がゴディサールのような人間を雇った目的は、端的に言って地方から金を集めることであった。つまり「てこでも動こうとしない金、田舎の巣窟に引きこもった地主の金」を「言葉がふるう強い圧力」によって動かすことである（p.563）。この時代、財産というのはまだまだ土地に結びついていた。問題となるのは地代の資本転化もしくは不動産の動産化であって、地方の土地所有者層が死蔵している財産を、中央の銀行に集結し、それを各種産業に投資することが必要となっていた。しかしこの仕事はそれほど簡単なものではない。必要なのは「地方の隠れ家に埋もれた金を、純粋に知的な操作によって引き出すこと、しかも何の苦痛もなしに引き出すこと」（p.564）であり、ここで「一流金融界」（財界）と「一流の知的外交界」（ジャーナリズム・広告産業）、そして「出張セールスマ

ン」という三者の協力が要請されることになる。

ベルナール・ギュイヨンによれば、当時のパリの資本家たちにとって、フランスの「地方」というものは、後の植民地征服時代におけるアジアやアフリカのような対象であった。[18] つまり開拓し、その蒙を解き、目覚めさせ、とりわけ搾取するべき新世界だったのである。このことは、『ゴディサール』の中で、出張セールスマンがその口上をたずさえて、いざ「氷の海へ、イロコワ族〔インディアン〕の国へ、フランスへと向かう」(p.564) といった表現によく表れている。一方のどかなトゥーレーヌ地方は、「フランスのトルコ」(cette Turquie de la France) と呼ばれ、怠惰なトゥーレーヌ人は、「ござの上のインディアン」(l'Indien sur sa natte)「長椅子の上のトルコ人」(le Turc sur son divan) にも喩えられている (p.576)。そしてこの怠惰でかつ頑迷な地方にどうしても食いつくことのできないパリの投機家たちは、その地を「野蛮な」(barbare) 土地と呼んでいたのだった (p.578)。

しかしながらこの物語の眼目のひとつは、そうした中央集権化の圧力に対する地方の抵抗にあることも確かである。辣腕で聞こえたセールスマンは、パリからきた男に一泡吹かせてやろうとするトゥーレーヌの住人たちのたくらみに、ものの見事に引っかかるのである。ここで表明されているのは、首都パリの狂気じみた産業化に対する地方の賢明さであり、しかも本物の「狂人」の姿を借りた逆説的な賢明さであると言えるだろう。いわば狂気をもって狂気を制するという戦法である。それではこの作品においてバルザックは、地方人の立場に立って、パリを中心とする社会経済全般の進歩に反対する退行的な立場をとっていると言えるのだろうか。

この問いにはやはり否と答えざるを得ないだろう。「出張セールスマン」なる人種を、同時代の風俗習慣によって新たに生み出された興味深い人種として分析する冒頭部の社会学的考察は、そのような社会的発展が不可避的なものであることを表明しているし、また活力あふれるゴディサールの人となりは、すでに述べたように発展しつつある資

本主義の躍動そのものを体現しているようである。また結末部において、ゴディサールがヴーヴレでの失敗を体面を失うことなしになんとか切り抜け、アングレームからパリへと向かう長距離乗合馬車に同乗したうぶな青年相手に、連中をやりこめてやったとうそぶく箇所では、地方の頑強な抵抗も、この「名うてのゴディサール」の前ではものの数ではないこと、中央集権の強大な力は、確実に進展していることが示唆されているようである。またこの結末部は、ベルナール・ギュイヨンが指摘しているように、陽気で快活なセールスマンの姿に、謎めいた深さを付け加える働きをしていることも述べておかねばならない。[19] というのも、『ゴディサール』を書いた十年後、バルザックはやはりアングレームからパリへの途上で、若い青年に人生の機微を説く老獪な男を登場させているからである。その男こそカルロス・エレーラ神父ことヴォートランに他ならない。

『ゴディサール』にはしたがって、中央の資本主義の急速な進展に対するバルザックの両義的な姿勢が反映されていると言えるかもしれない。しかしながらその両義性は、かならずしも矛盾を示すものではないと思われる。実際この作品においてゴディサールは、付け焼き刃でその教義を身につけたサン＝シモン派の新聞を売ることには成功しなかったが、彼自身がそのアイディアの素晴らしさを見抜き、進んで販売を引き受けた〈子供新聞〉は飛ぶように売れて、マルガリティスじいさんすらもそれを一部予約するのである。この理由のひとつはその価格にある。〈地球〉紙は、他の多くの政治新聞と同様に、年間の予約購読料が八十フランもしたが、(子供新聞) の方はたったの七フランだったからである。またそれに劣らず重要な理由として、七月革命後のこの時代、フランスの中流ブルジョワ階級においては、政治新聞よりもむしろ実用的な知識や子供の教育への欲求が高まっていたことが挙げられるだろう。マルガリティスさえ、その点に関しては驚くべき理解力を発揮している。「知的開発じゃな、子供というのは？……人間による人間の、ではないかな？」(p.592) と、この狂人は看破（？）するのである。

役に立つ知識を低価格で提供すること、新興しつつあるブルジョワジーのこの潜在的な要求に目を付けたのは、天才的ジャーナリスト、エミール・ド・ジラルダンであった。[20] 当時の新聞の多くは政治的な主義主張を展開する機関紙であったのに対し、ジラルダンは〈ヴォルール（盗人）〉（一八二八）、〈ラ・モード〉（一八二九）、〈ジュルナル・デ・コネッサンス・ジュティル（実用知識新聞）〉（一八三一）、〈ミュゼ・デ・ファミーユ（家庭博物館）〉（一八三三）といった新しいコンセプトの実用的な新聞を創案して、次々と予約購読者を開拓し、一八三六年七月にはついに日刊紙〈プレス〉の発刊にいたる。〈プレス〉は購読料を抑え、かわりに広告収入を主要な財政基盤としたこれまでにない薄利多売方式の新聞であった。ジラルダンの当初からの協力者は、アルジャンタンのコレージュ時代からの友人で、洒脱なダンディとしても有名だったロトゥール＝メズレーであるが、『ゴディサール』の中に出てくる〈子供新聞〉というのは、実際にロトゥール＝メズレーが、一八三二年八月、単独で発刊して、大成功をおさめた新聞だった。

バルザックは一八二九年以来、この二人の友人と親交を結んでおり、執筆の面でも資金や企画の面でも、積極的に協力していた。バルザック自身も、できるだけ低価格で知識や教養を広め、それによって多額の利益を得るというアイディアには事欠かなかったが、どういうわけか一度も成功したためしはなかった。古くは一八二五年、文学で身を立てる前に、出版業者として縮刷版のモリエール全集とラ・フォンテーヌ全集を印刷するが、これは彼に莫大な借金を残しただけだった。一八三〇年には、ジラルダンともう一人との三人の共同出資で、〈フィユトン・デ・ジュルノー・ポリティック〉という書評専門の新聞を創刊するが、これは十一号を出しただけで廃刊に追い込まれた。また同じ年の末にバルザックは、「一般予約購読協会」（Société d'abonnement général）という壮大な書籍販布計画を考案し、三年間ほどその考えに熱中している。[21] その計画によれば、購読者は年間予約料百二十四フランで、二週間ごとに四冊、

一年に九十六冊の本を受け取ることができるシステムになっていた。バルザックはこれをフランス全土に売り込んで、巨万の富を手にすることを夢見ていたのである。この計画も一八三四年春には頓挫するが、一八三三年秋、『ゴディサール』を執筆中のバルザックは、この「大衆に歴史的な知識を浸透させるという有益な考え」(une pensée utile: faire filtrer des connaissances historiques dans la masse)(ズュルマ・カロー夫人への手紙)[22]に熱中していたのである。

バルザックの夢は、ゴディサールが開陳する生命資産保険の考え方に如実にあらわれている。その基本的なコンセプトは、各人が自分の持っている才能を「知的資本」(capitaux intellectuels)として、あらかじめ金銭的に評価するというところにある。もし本人が死亡した場合、遺族がその金額を受け取る。これだけなら一般的な生命保険の仕組みと変わりがないと言っていいだろう。しかしゴディサール=バルザックの真意はもう少し別のところにあるようである。つまり才能にあふれ、将来有望であるけれども金のない人間がこの資産保険に加入した場合、加入者はその保険証書一枚で、だれからでもお金を借りることができるというのである。

「ひとりの人間がいるとします。将来があり、きちんとしていて、自分の技能で身を立てています。お金が必要となり、借りようとします……だが、一銭も借りられないのです。文明全体が寄ってたかって、この男に金を貸すことを拒絶するのです。この男は、心の中ですでに文明を支配しており、いつの日か、絵筆か彫刻刀か言葉によって、あるいはひとつの思想か体系かによって、実際に文明を支配するにちがいないというのにです。文明とはなんと冷酷なのでしょう! 自分にその華を与えてくれる偉人たちに、パンを与えないのです。文明という、この金ぴかのあばずれ女は、彼らを養うのに、侮辱や嘲笑しか与えないのです!……これはひど

い言い方かもしれませんが、取り消すつもりはありません。この真価を認めてもらえない偉人は、そこで、われわれのところを訪ねてきます。われわれはその方を偉大な人間と見なし、うやうやしく迎え、その方の話を聞きます。その方はこんなふうに申されるのです。『資産保険の方々、私の人生は、これこれの額の値打ちがあります。私が生み出すもののうち、これこれのパーセント分をあなた方に提供しましょう!……』するとわれわれはどうするか?……ただちに、出し惜しみすることなく、われわれはその方を、文明の素晴らしい饗宴に迎え入れるのです、有力な招待客として……」

「それじゃあ、葡萄酒がいるな……」と狂人は言った。

「有力な招待客として、です。その方は、保険証書に署名され、私どもの紙切れ、ちっぽけな紙切れを受け取られます。それは卑しい紙切れではありますが、しかし、その方の天才が持っていた力以上の力を発揮するのです。実際、もしお金が必要になれば、だれもがその証書を見て、お金を貸してくれるでしょう。証券取引所でも、銀行でも、どこででも、高利貸しのところですらも、その方は、担保を提示するのですから、お金を借りられるのです。さて、旦那様、これこそが社会制度の中で、埋められねばならない大きな欠落ではなかったでしょうか」(p.587-8)

このようにすれば才能ある若者は生活の心配から解放される。そしてそれゆえ時間を節約することができるし、その時間を知的生産活動のために有効に利用することができるというのが、その「保険」の正体である。これは「保険」というよりも、むしろ才能を担保にしての一種の「融資」であると考えてよいだろう。しかしひるがえって考えてみれば、これは生涯を通じて、まだ書かれていない作品を担保に出版社からの前借りを重ね、約束手形を振り出し続け

たバルザックが、現実におこなっていたことであったといえば言い過ぎであろうか。ただ現実の生活には締め切りに追われ、借金取りに追い回されるという責め苦がつきまとっていたが。それゆえこの「生命資産保険」のシステムは、バルザックの究極の夢であったと言えるだろう。そして出版社に責め立てられ、せっぱ詰まった極限的状況で『ゴディサール』を執筆したバルザック自身、自ら選択したこの創造活動のサイクルが、まさに「狂気」と紙一重にあることを、十分に自覚していたにちがいないのである。

［注］

(1) 本論は、藤原書店より刊行予定の〈バルザック『人間喜劇』セレクション〉第七巻収録作品、『ゴプセック』『ニュシンゲン銀行』『名うてのゴディサール』（拙訳）に付した訳者解説と一部重複することをお断わりしておく。

(2) 本論で用いたテクストは、以下のものである。Honoré de Balzac, *L'Illustre Gaudissart*, texte présenté, établi et annoté par Pierre Barbéris, in *La Comédie humaine*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, tome IV, 1976, pp.561-598. この版からの引用のページ数は、本文中にカッコに入れて示した。

(3) Honoré de Balzac, *Lettres à l'Etrangère*, C.Lévy, tome 1, pp.71-72

(4) *Ibid.*, p.96

(5) Bernard Guyon,《Introduction》à son édition de *L'Illustre Gaudissart*, Editions Garnier Frères, 1970, p.XX

(6) バルザックの友人たちにおけるこの作品の不評については、*ibid.*, p.XXXIV

(7) 前記、注（5）参照。

(8) 前記、注（2）参照。

(9) Shoshana Felman, *La Folie et la Chose littéraire*, Editions du Seuil, 1976. 邦訳『狂気と文学的事象』土田知

則訳、水声社、一九九三年、「狂気と言説のエコノミー――『名高きゴディサール』」、pp.197-218

(10) Pierre Barbéris, p.545

(11) *Ibid.*

(12) *Ibid.*, pp.554-555

(13) 拙論参照。「ゾラ『ボヌール・デ・ダム百貨店』における近代消費社会とジェンダー（1）」、EBOK第9・10合併号、神戸大学仏語仏文学研究会、一九九八年、pp.113-148

(14) Bernard Guyon, p.XXI

(15) *Ibid.*, p.XXIII

(16) *Ibid.*, p.XXVII

(17) 「バルザックとフランス近代の金融社会――『ゴプセック』から『ニュシンゲン銀行』へ」『近代』第八三号、一九九八年十二月、pp.67-92. 特にpp.84-86を参照。

(18) Bernard Guyon, p.XXXIX

(19) *Ibid.*, p.XLIX

(20) エミール・ド・ジラルダンについては、鹿島茂『新聞王伝説』（筑摩書房、一九九一年）などを参照。

(21) この計画については次の論文を参照。Roland Chollet, 《Un épisode inconnu de l'histoire de la librairie : la Société d'abonnement général》, *Revue des Sciences humaines*, 1971

(22) Lettre à Zulma Carraud, vers le 8 septembre, 1833. Honoré de Balzac, *Correspondance*, édition de Roger Pierrot, Editions Garnier Frères, 1962, tome II, p.359